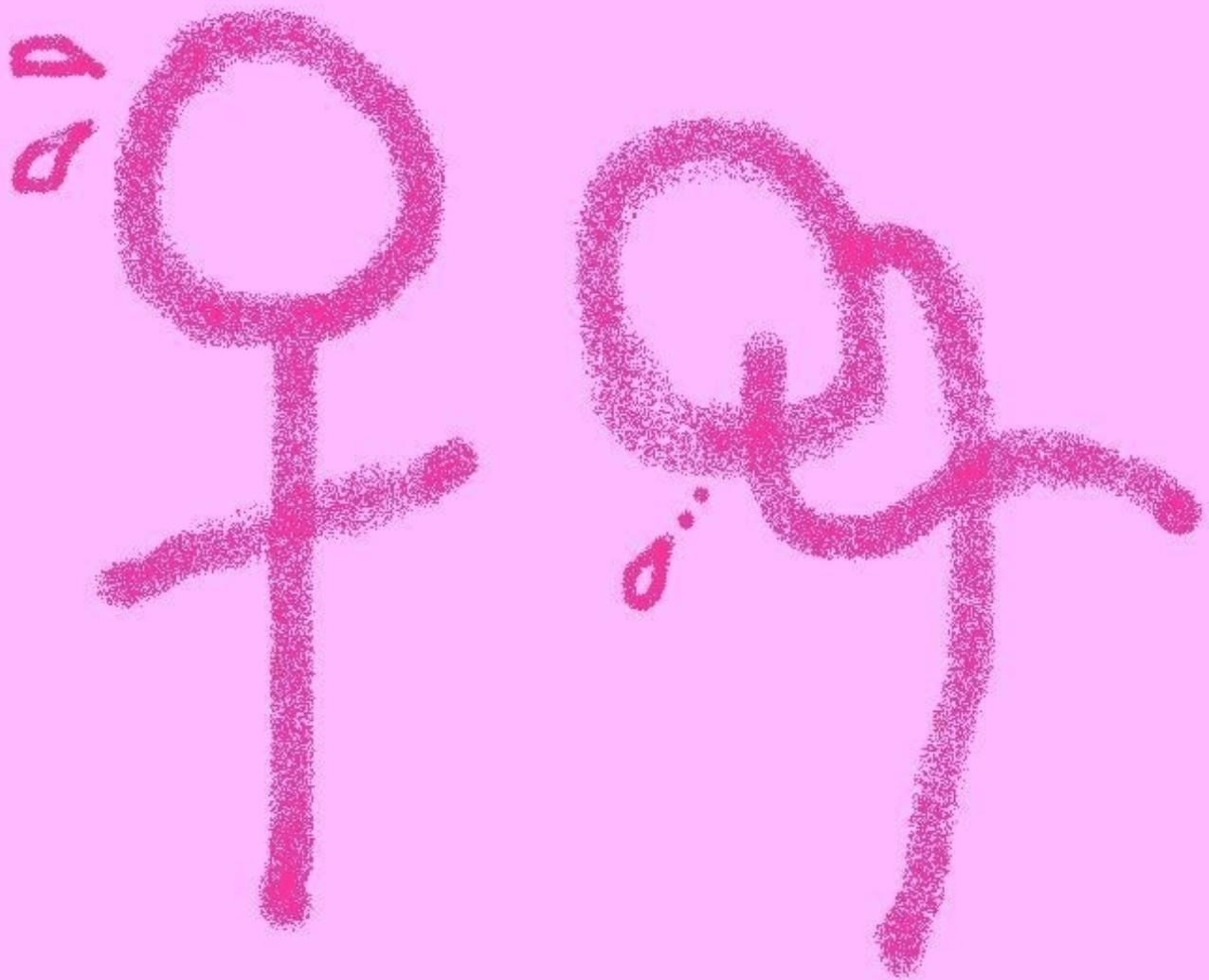


短編シリーズ

おにゃのこのカケラ

vol.1



ゆきの

恋文 あらすじ

ガールズ・ラブ短編小説 第一弾 「恋文」

高校1年生の恵（めぐみ）は生まれて初めてラブレターを書く。

そのお相手は、同級生の女の子！ ピュアな恋心は、うまく伝わるだろうか？

リアルなセミフィクションストーリー。

わたしは、今年の春から隣町の高校に通う一年生、藤野 恵。
夏休みの終わりに、とんでもない事に気がついてしまった…。

始まりは、入学式の次の日だった。HRで、委員や係を決めていた時、女子の応援委員だけが決まらずに、（誰かやってよ…）という気まずい雰囲気が流れていた。委員会も係活動もまだ担当していない人はみんな、自分にお鉢が回ってこないようビクビクと下を向いていた。HR終了のチャイムが鳴ると、特に男子が露骨にイライラしだして。その時、ずっと高く手を挙げた女子がいた。

「あたし、やります。兼任でも問題ないですよ？先生。」
先生は助かった、という表情をしていたけど、ちょっとびっくりしていた。
「ええと、文化祭実行委員と兼任？それは、いいけど…。」
「じゃ、やります。」
口ごもる先生に、潔く平然と言ったのけた彼女は…カッコよかった。

彼女の名前は、寺崎 はるか。何故か同じ中学校だった生徒はみんな、はるねえさん、と呼んでいた。彼女のことを、少しずつ知っていくうちに、その理由はなんとなく分かるようになった。
彼女は、毎朝、クラスで一番早く教室に来て、窓を開け、窓辺の席で腰まである長い黒髪を風に泳がせて本を読んでいる。クラスメイトが登校してくると、男女関係なく全員に微笑んで、「おはよう！」と声をかけるのだ。無視されても、荒れてる男子に睨みつけられても、姉御肌の彼女の日課である「おはよう！」は誰に対しても変わらず続いた。

うちの高校は、部活動は必須で、4月、5月中に所属する部を決めることになっていた。何回でも見学や仮入部をしていいことになっていたが、5歳から竹刀を握っていたという彼女は、他の部には興味はない、と言い、入学早々すぐに剣道部に入ってしまった。わたしは、いろんな部を転々とし、5月の最後の週になってようやく、合唱部に落ち着いた。

引っ込み思案なわたしが、女子の中で仲間はずれになった頃から、彼女はわたしとだけ一緒に過ごすようになっていた。彼女と二人でお弁当を食べていると、わざと聞こえるような声で、女子達がわたしの悪口を言うこともあった。そんな時も彼女は、超然としていて、
「何か用なら、言いに来たらいいじゃない？」
と、女子集団を一瞥し、何事もなかったかのようにわたしに笑いかけるのだった。

決定的だったのはあの日…。部活がテスト前で休みの日だった。
放課後の教室で、数学の課題をやっていると、隣の席の男子が、

「真面目だなー。ちょっとノート写させろよ。」

と言って、わたしのノートを無理やり取り上げようとして。

「今、使ってるから、返して！」

って半泣きでもみ合いになっていた時には、すごいタイミングで、

「何してんの！！」

って、彼女の怒声が飛んできた。

借りるだけなのに...、と、呟く男子に、彼女は、こう言ったのだ。

「あたしのメグに、何すんの！？」

と。

あの日の夜から、わたしは、毎夜泣いていた。

次の日、教室に入った瞬間、わたしは彼女の姿に驚愕した。彼女はあの風にそよぐ長い黒髪をバツサリと切り、襟足を少し刈り上げたくらいのベリーショートになっていた。なんだか、理由を聞いてはいけない気がした。

「ずいぶん、思い切り短くなったね。」

とだけ言うと、

「そろそろ夏だし。頭、涼いよー。」

と彼女は笑った。いつものように。

その日の夜も、その次の日の夜も、わたしは声を殺して泣いていた。次から次へとあふれる涙の訳は...あの時は、まだ、分からなかった。

夏休みに入って、部活が忙しい彼女とは、全く会えない日が続いた。わたしはというと、休み中は部活がなかったから、自分の部屋に引きこもってゴロゴロしていた。夜、目を閉じると、まぶたの裏に浮かぶのは彼女の姿ばかりで。彼女の笑顔を想うと、息が苦しくて、切なくて、熱い涙が頬を伝った。泣いて、泣いて、泣き疲れなければ、眠ることすらできなくなった。わたしの胸を痛めつける、この感情が、自分でもよく分からなくて、それが、辛かった。

お盆を過ぎた頃、妙にリアルな夢の中で、わたしはいつかの、彼女の声を聞いた。

「...あたしのメグに！」

一瞬で目が覚めて、飛び起きた。

ああ、やっぱり、そうだったんだ...。気がついてしまった。背中に、冷たい汗が流れた。

今まで、もやがかかってよく見えなかった自分の思考回路が、急にクリアになった。わたしの中にばらばらに散らばっていたパズルのピースは、次々に形を成していき、わたしは、わたし自身の心に棲む感情の正体を、はっきりと自覚した。

彼女...はるかが、『好き』...

自分の気持ちがよく分からなくて、辛かったのに。分かってしまったてからは、それまでの何倍も辛かった。この想いをどうしようか？隠してしまえるものなら、そうしたかった。けどそれは、水底に、風船を沈めようとするのに似ていた。わたしの心の奥底に、沈めようとすればするほど、『好き』という感情は強い力で、浮かび上がってくる。身を切られるような切なさに、頬を拭うこともせず、ただ涙を、流した。

そういえば、わたしは、昔から、隠し事なんてできない性格だったんだ。

わたしは、夏の終わりに、決意をした。彼女に、手紙を書こう。ただ素直に、わたしの想いを綴ろう。

その後、どうするかなんて、考えられないままに、わたしは、思いの丈を込めて、手紙を書いた。

はるかへ

夏休み、部活頑張ってた？剣道場、暑いよね。

わたしは、自分の部屋で課題やっつけて、あとはボーっと本を読んでいるうちに、夏が終わりそうだよ。

急に、手紙なんて、びっくりした？

わたしは、今、はるかに伝えなきゃいけないことがあって、この手紙を書いているんだ。

できたら、最後まで読んでくれたら、はるかの気持ちを教えて欲しいな、って思う。

わたしは、クラスに同じ中学からの友達もいなくて、きっと、ずっとひとりぼっちなんだろうと、思ってた。

本当は、はるかが持っているような強さに憧れてた。でも、わたしは弱かったから、情けないけど、

やっぱり、いじめられっ子になりかけてた。

はるかって、責任感とか強いし、そんなわたしを可哀想って思ったのか、分からないけど、

わたしと、一緒にいてくれるようになって、すごく、嬉しかった。

はるか二人でいられるのなら、他に友達なんていらんし、そのほうが幸せ、って思ってた。

でもね。今、わたしは、はるかに会うのがちょっと怖いんだ。

前みたいに、はるかと一緒にいたら、きっと、とても辛いだろうと、思う。

どうしてか、わかる？ ごめんね、本当は、一緒にいたいのに、ごめん。

ねえ、はるかは、覚えてるかな？

わたしが男子にちょっかい出されてた時に来てくれて、

「あたしのメグに、何すんのよ!？」って、怒ってくれたこと。

わたしは、はるかのあの時のセリフを、今でもずっと、

宝物のように抱きしめて、泣いて、いるんだよ。

いきなり、気がついたんだ。

わたしはね、はるかのことが、友達としてではなく、恋愛対象として「好き」になっちゃってた。

何も言わずに、今まで通り、友達でいられたらよかったかも知れないね。
ごめんね。わたしは、それができるほど、強くなかった。弱い自分を、毎日責めてる。
自分の気持ちに嘘をついたら、わたしが、わたしでいられなくなる気が、したんだ。
矛盾してるけど、今、何よりも、はるかを傷つけてしまうことが、怖いよ。
自分が嫌われるかも知れないと思うよりも、ずっと怖いよ。

はるかを、男の子としてみているわけでも、
自分が男の子のような感情ではるかを好きなわけでも、ないと思う。
わたしは女の子として、女の子のはるかが好き。

こんな感情をぶつけられて、はるかは困るかも知れない。
怒るかも知れないし、気持ち悪い！大嫌い！って、思うのかも、知れない。
でも、それは仕方ないし。はるかに、もう、顔も見たくない！って、言われたとしても、
この手紙を書いたことは、後悔はしない。たぶん、ね。

はるかは優しいけど、無理して、同情とか、そういう気持ちで返事はしないで、ね。
わたしは、ひとりであるのも慣れてるから、心配は、しないで。

じゃ、また。
新学期に学校で。

恵

藤野

空色の便せんに書いた、ラブレター。

所々、涙で字がにじんだわたしの初めてのラブレターは、夏休みの最後の日までには彼女の元へ届くはず。

そして、新学期が、始まった。その朝、わたしは、かなり早めに、教室に入った。

一学期中、一日も欠かさず教室に一番乗りでやってきていた彼女の姿は、そこにはなく。その原因が、わたしの書いた手紙である事は、明らかだった。今日は、学校を休むのだろうか、と、不安になった8時過ぎ、彼女はやっと教室に現れた。

わたしを見つけると、少しだけ寂しそうな目で微笑んで、

「おはよう。」

と、言ってくれた。彼女の元気のない声に、悲しくなって、下を向いて

「おはよう。」

と、返した。

お互いに、言いたい事が上手く言えない雰囲気のまま、放課後になった。

帰り支度をしていると、彼女が肩を叩いた。

「少し、話そっか。」

わたしは、無言で頷いて、彼女の後をついていった。わたしたちは、誰もいない中庭のベンチに並んで腰掛けた。

「メグ。」

「うん...。」

何を言えばいいか、ぜんぜん思い浮かばなかった。彼女は柔らかに笑って、私に言った。

「メグ、手紙、ありがとう。」

「あ...ああ。」

わたしが、曖昧な相槌を打つと、彼女は、わたしの右手をそっと握った。心が、ざわついた。嫌われた、と、思っていたから。彼女は急に強く、手を握り、空を見上げて息を吐いた。そして、搾り出すように、わたしに話した。

「...あたしね、...嬉しかった。」

「...えっ。」

「初めて、ラブレターもらった。」

「うん...。」

「...ごめんね。」

彼女は、ぽつりと、呟いて、言葉を切った。わたしの手は、痛いくらいに握り締められていた。彼女の様子が何かおかしいと思って、恐る恐る顔を覗き込むと、彼女は...涙をこぼしていた。彼女が泣くのを見たのは、初めてだった。

「はるか...。」

「メグは！」

わたしの言葉をさえぎるような大きな声に、びくっ、と体が震えた。

「弱くなんてない！メグは、全然、弱くなんて、ないよ...。」

そしてまた、彼女は、涙を流す。意味が分からずに、私はただ、おろおろしていた。

「...あたしは、多分、メグが気づくずっと前から、気がついてたんだ...。」

彼女が、一生懸命、言葉を探しているのが分かった。

「手紙に書いてあった、あの時のこと。メグが、男子に声かけられてて...あたしが思わず、『あたしのメグに...』って、言っちゃったの、あたしも、ずっと、覚えてるよ。」

わたしは、手に汗をかいてるのを気にしながら、言った。

「あ、ありがとうね、あの時は。」

彼女は、真剣な表情で、わたしと向き合った。試しに聞いてみた。

「あの後さ、はるか、バツサリ髪切っちゃったよね...。」

「うん...。」

「あれってさ、...どうしてだったの？」

まだ目尻に光っていた涙を、彼女は乱暴に手の甲で拭う。

「強く、なりたかったから。」

意外な答えに、わたしは、えっ？と、聞き返した。剣道の事かな？とも思った。

「ちゃんと、メグを守れるくらいに、強くなりたいてって、思ったんだ。あれは、自分に気合入れるため。」

わたしを、守れる、くらい？

正面から、わたしの顔を見て、彼女は笑った。

「可哀想なんて、そんな理由じゃない。あたしは、メグが好きになって、だからメグといつも一緒にいたいと、思ったんだよ。」

一瞬、頭の中が真っ白になって、それから、体が、熱くなっていった。

「それ、って...。」

「うん。友達としてじゃなく、メグと同じ気持ちで。あたしは、メグに恋していたんだ。」

「恋...心？」

「そう。あたしは、自分の気持ちをだいぶ前から知っていたけど、なかなか言えなくて。あたしは、臆病だったんだ。メグに嫌われるのが怖くて、友達ごっこしてた。」

「...は...るか...。」

泣き虫なわたしは、また頬を濡らしていた。今は、嬉し涙で。

「あたしが、弱くて、ゴメン。自分の気持ちをぶつける強さが足りなくて...メグに、いっぱい辛い思いさせて、ゴメン...。ゴメンね...。」

手をつないだままの彼女が、立ち上がり、わたしも手を引かれて立った。

「そ、そんなの…。もう、いい。いいの…。だって…。」

手をゆっくり離れた彼女は、ふわりと、わたしを抱きしめた。ちょっとだけ、背伸びをして、彼女の肩に濡れたままの頬を押し付けた。

「メグ。本当は、あたしが、メグに先に言いたかった。だから…ちゃんと、言わせて。」

「うん。」

わたしは、やっと顔を上げて、彼女に笑顔を見せることができた。

「…あたしは、メグが、好き。大好き。だから、ずっとそばにいたい。一緒に、笑っていたい。あたしと、付き合ってくれますか？」

かしこまってて恥ずかしかったけど、わたしは、きちんと彼女の目を見て答えた。

「はい…。わたしも、はるかが、好きだから。ずっと、ずっと、一緒にいたい。です。」

照れ隠しに、下を向いた時、同じ動作をした彼女のおでこが、こつんと当たった。どちらからともなく、しばらくクスクスと笑いあって…彼女がまた真剣な顔をしたから、誘われるように瞳を閉じた。

わたしは、彼女が好き。強さも、ちょっぴりの弱さも、全部、ひっくるめて、丸ごと、彼女が好き。

彼女の唇が、わたしの唇に、優しく触れて…そっと、離れた。

最後まで、読んでくれた方、本当にありがとうございます。

しばらく文章を書いてなかったので、長編を書く前の肩慣らしのつもりで、
軽く短編とか...なんて考えてたのに、気がついたら、
ど真ん中ストレートに全力投球してたゆきのです...^^ ;

しかも、エロがないし、内容重い感じだし...orz

「おにゃのこのカケラ」は百合系短編小説を、気まぐれに書き綴ってみようというシリーズ
です。

こんなのが読みたい、とか、読者様の要望がもしあれば、チャレンジしてみたいです。

例えば、エロいのとか、エロいのとか、エ... (r y

色々と試行錯誤している途中なので、
何か、感じた事がありましたら、コメントをよろしくです！

おにゃのこのカケラ vol.1 「恋文」

<http://p.booklog.jp/book/33413>

著者：ゆきの

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukino0705/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33413>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33413>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.